

夏休みにおける子どもの生活体験（2）

南 本 長 穂

（教育学研究室）

（平成11年10月21日受理）

Elementary School Students' Life Experience in the Summer Vacation (2)

Osao MINAMIMOTO

1. 研究の動機・目的

子どもは夏休みをどのように過ごしているのか。また、長期の休業日である夏休みは子どもの生活にとってどのような意味をもっているのか。今日まで学校や教師は夏休みに際して、望ましい生活のあり方という点から、生活の心得的なものについては指導してきている。しかし、夏休みの教育的意義を実現するために、子どもが夏休みの学習や生活をどうすればよいのか。教師は何をどの程度指導できるのか。学校内での学習や生活に比べて、夏休みにおける子どもの生活や学習の現状は明らかでない。もちろん、現状を理解できたとしても、教師としてどう関与していくかといった問題はまた別の次元の問題でもある。夏休みにおける子どもの生活や学習は、周知のように個々の家庭の自由裁量の内にあり、今後とも、学校や教師が積極的にかかわっていくということはないであろう。

しかしながら、完全週5日制が実施されると、ほぼ登校日が190日程度、休業日が170日程度となり、1年のうち半分近くが休業日ということになる。このことから、子どもにとっては、夏休み、冬休み、春休みなどの長期にわたる休業日はもちろん、土曜、日曜日の週2日の休業日をどのように送るかという問題は、子どもの生活や学習にとって大きな問題となる。この点を踏まえて、夏休みという長期にわたる休業日における子どもの生活体験を、研究対象として取りあげることが、今後の子どもの生活と学習を考える上で重要ではないかと考えた。

以上の問題設定から、まず子どもの長期休業日の過ごし方として夏休みを取りあげ、夏休みにおける子どもの生活の現状を明らかにしていくことにする。そして、こうした実態解明から休業日や休日の増加と子どもの生活体験や生活の変化との関連性を明らかにすることができるのではないかと考えた。もちろん、子どもの生活体験は、近年になるほど、勉強時間とテレビやファミコンなどの遊びに代表されるように間接経験は増加するが、身体をつかった遊びや手

伝いなどの直接体験は減少傾向にあるということが指摘されて久しい。生活体験の質も、量も変化しているのではないか。こうした子どもの生活体験の問題が、もっとも顕著にあらわれている夏休みの期間をみることによって、今日、学校教育にもその必要性が要請されている体験学習の展開にも寄与できるのではないかと考えた。

本稿では、つぎの2点に焦点を合わせて、調査結果に基づき検討していく。

第1点は、夏休みの楽しさ感覚、つまり子どもは夏休みの生活をどのように受けとめているかを、「楽しさ」と「充実度」という点からみていく。

第2点は、子どもは、夏休みの生活体験をどのように評価しているのか。何に満足を見出し、何を变えたいと考えているのか。

第3点は、夏休みの生活や学習に対する自己評価と、夏休みにおける家庭での学習や「教科」学習の好き嫌いとはどのような関連があるのか。

なお、前回の報告では、1. 夏休みにおける家庭での「お手伝い」体験、2. 生活体験を7つに区分（文化的体験、自然体験、人とのかかわり体験、創作体験、社会体験、芸術文化体験、家庭生活体験）し、学年別、男女別に特徴を探り、3. この体験の有無と学校での「教科」学習の好き嫌いとは関連の深い特徴を明らかにした⁽¹⁾。

2. 調査の方法と回答者の属性

調査は、愛媛県松山市3つの公立小学校で実施した。表1が調査の概要であり、表2が回答者の属性を示している。有効回答を得たのは、小学校4年生(351人)、5年生(378人)と6年生(403人)、合計1132人であった。調査は、子どもの夏休みに対する記憶が薄れていない時期を考慮し、2学期当初に、学級で調査票に記入する集合回答方式により実施した。調査実施時期は、1996(平成8)年9月である。なお、愛媛県では、小・中学校での夏休みの期間は通常7月21日から8月31日までである。

表1 調査の概要

調査の時期	1996(平成8)年9月
調査地域	愛媛県松山市
調査対象者	公立小学校4, 5, 6年生(3校)
回答者	1132人
調査方法	学級での集合調査

表2 回答者の属性

	(人数)		(人数)	
4年生	31.0%	351	男子	51.1%
5年生	33.4%	378	女子	48.9%
6年生	35.6%	403		
計	100.0%	1132	計	100.0%

3. 調査結果の報告

1) 「楽しさ度」と過ごし方の「自己評価」

子どもたちは夏休みの生活をどのように受けとめているのか。まず、表3は、「夏休みは、もっと長いほうがよいと思うか」という設問で聞いた。男女別にも、学年別にも有意差が認められる。例えば、「もっと長いほうがよい」と答えた者は、全体で79.5%、男女別には、男子で84.6%、女子で74.2%。学年別には、4年生で86.0%、5年生で81.1%、6年生で72.4%である。このことから、4年生が5年生よりも、5年生が6年生よりも、つまり学年段階が低いほ

夏休みにおける子どもの生活体験（2）

ど夏休みがもっと長くなることを望んでいる。「もう少し短い方がよい」を選択した子どもは非常に少ない（2.8%）が、学年段階が上がると、「今ぐらいでよい」を選択する子どもが増えている。逆に言えば、学年段階が上がるほど、夏休みの受けとめ方が変化している。なお、前年度の5年生と6年生を対象とした調査でも、5年生に比べると、6年生の「もっと長い方がよい」と回答した数値は低いといった、同様な結果がみられた。

表3 夏休みの長さについてどう思いますか

	学 年 別			男 女 別		全 体
	4 年 生	5 年 生	6 年 生	男 子	女 子	
もっと長い方がよい	86.0	81.1	72.4	84.6	74.2	79.5
今ぐらいでよい	10.3	17.1	24.9	13.1	22.5	17.7
もう少し短い方がよい	3.7	1.8	2.7	2.3	3.3	2.8
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	$\chi^2=29.27$ df = 4 p<.0001			$\chi^2=19.05$ df = 2 p<.001		

表4 夏休みを通して楽しかったですか（選択回答）

	学 年 別			男 女 別		全 体
	4 年 生	5 年 生	6 年 生	男 子	女 子	
大変楽しかった	73.1 (256)	54.4 (205)	45.6 (182)	54.7 (315)	59.6 (328)	57.1
まあまあ楽しかった	24.0 (84)	39.3 (148)	48.9 (195)	39.8 (229)	36.0 (198)	37.9
あまり・全く楽しなかった	2.9 (10)	6.3 (24)	5.5 (22)	5.6 (32)	4.4 (24)	5.0
計	100.0 (350)	100.0 (377)	100.0 (399)	100.0 (576)	100.0 (550)	100.0
	$\chi^2=61.02$ df = 4 p<.0001			$\chi^2=3.06$ df = 2		

と、6年生の「もっと長い方がよい」と回答した数値は低いといった、同様な結果がみられた。

表4は、「夏休みを通して、楽しかったですか」という設問への回答である。結果をみると、男女別には有意差がみられない。だが、学年別にみると有意差が認められる。これも前年度の調査結果と同様である。「たいへん楽しい」と回答している者の比率は学年段階が上がるほど低くなる傾向がみられる。その回答率は、全体で57.1%、4年生で73.1%、5年生で54.4%、6年生で45.6%である。なお、「大変楽しかった」「まあまあ楽しかった」の2つの回答数値を合わせると、4年生は97.1%、5年生は93.6%、6年生は94.5%とほとんどの子どもが夏休みを楽しかったととらえている。

この2つの結果から、学年段階が低い子どもほど、夏休みを楽しんでいる割合が高いことがわかった。では、なぜ学年段階が低い子どもほど、楽しいと感じる者の比率が高くなっているのか。昨年度の調査では、生活体験の質と量という点から検討を加えた。今回の調査では、子どもの自己評価の視点を加味しながら、以下、分析をすすめることにする。

表5は、「今年の夏休みのすごし方は自分で何点ぐらいだと思いますか。」という設問で、夏

休みの生活の過ごし方を振り返っての自己評価（採点）を、100点満点中、何点かという形式により、回答してもらった。結果をみると、男女別にも、学年別にも、ともに有意差が認められた。まず、学年別にみると、「90点以上」

表5 今年の夏休みの過ごし方は自分で何点ぐらいだと思いますか

(自己採点)	学 年 別			男 女 別		全 体
	4 年 生	5 年 生	6 年 生	男 子	女 子	
90点以上	35.3 (122)	28.6 (106)	27.0 (106)	33.6 (191)	26.4 (143)	30.1
70 ~ 89	35.0 (121)	34.1 (126)	46.8 (184)	32.2 (183)	45.8 (248)	38.9
69点以下	29.7 (103)	37.3 (138)	26.2 (103)	34.2 (194)	27.7 (150)	31.0
計	100.0 (346)	100.0 (370)	100.0 (393)	100.0 (568)	100.0 (541)	100.0

$\chi^2=22.35$ $\chi^2=21.68$
 $df=4$ $df=2$
 $p<.001$ $p<.0001$

の点数を付けた子どもの比率は、学年段階が上がるほど低くなる傾向がみられる。その回答率は、全体で30.1%、4年生で35.3%、5年生で28.6%、6年生で27.0%である。なお、6年生では、「70~89」を付けた比率が高く、5年生では、「69点以下」を付けた比率が高い。他方、男女別にみると、男子は、得点が分散し、女子では、「70~89」の中間点が多いという傾向がみられる。

そして、表5-2では、この得点と先の設問「夏休みを通して、楽しかったですか」への回答との関連をみた。結果をみると、夏休みの過ごし方の得点と「楽しさ度」との間に、有意差が認められる。すなわち、「90点以上」の点数を付けた子どもでは、その72.6%が「大変楽しかった」と答えている。これに対して、「69点以下」を付けた子どもでは、「大変楽しかった」が45.5%、「まあまあ楽しかった」が45.5%、「あまり・全く楽しなかった」が9.0%であり、得点と「楽しさ度」の間に高い相関がみられる。

なお、得点を付けた理由や根拠については設問を設けて聞いてはいなかったが、記述していた小学生もいたので、それを記すと次のようである。例えば、高得点を付けた理由としては、「自分のことができたし、ほとんど規則正しい生活ができたから」（5年、女、80点）「事故や

表5-2 今年の夏休みの過ごし方は自分で何点ぐらいだと思いますか

	夏休みの過ごし方は何点？		
	90点以上	70 ~ 89	69点以下
大変楽しかった	72.6	55.0	45.5
まあまあ楽しかった	25.0	41.5	45.5
あまり・全く楽しなかった	2.4	3.5	9.0
計	100.0	100.0	100.0

$\chi^2=61.54$
 $df=4$
 $p<.0001$

けが、悪いことをしなかったから」（5年、女、80点）「宿題を早く終わらせれなかったから」（5年、女、80点）「早寝早起きがあまりできなかったから」（5年、女、85点）「ダラダラしていたから」（5年、男、80点）「宿題もしたし、楽しく遊んだから」（5年、男、90点）「すこしおこられた」（5年、男、80点）などである。100満点で回答を求めているので、減点した理由を記していることがわかる。

逆に、低い点数のそれは、「規則正しい生活をしなかったから」（5年、

夏休みにおける子どもの生活体験（2）

女、55点）「早ね早起きができなかったから」（5年、女、50点）「宿題を夏休みの最後の方になってやったから」（5年、女、50点）「計画的にできなかった」（5年、女、10点）「早ね早起きや規則正しいことができなかった」（5年、女、60点）「遊びすぎて、バランスのいい生活をすごせなかった」（5年、女、69点）「ちょっとしか勉強をしていないから」（5年、女、40点）「できたこととできなかったことがあった」（5年、女、70点）「規則正しくできなかったから」（5年、女、10点）「やるのが早くすまなかった」（5年、女、50点）「けがもしなかったし、とくに良いこともしなかったから」（5年、女、50点）「親の言うことをあまり聞かなかったから」（5年、女、60点）「早く寝なかったから」（5年、女、70点）「外で遊ばなかった」（5年、男、50点）「良いことをそんなにしなかったから」（5年、男、75点）「勉強をあまりしなかったから」（5年、男、50点）「車が通るところでうろうろしたから」（5年、男、30点）「早く起きれなかったから」（5年、男、30点）「宿題を早くすませず、ごろごろ寝ていたから」（5年、男、0点）「家の手伝いをしなかったから」（5年、男、3点）「ほとんど勉強をしなかった」（5年、男、10点）など、勉強とか、早寝早起きといった規則正しい生活のし方が主な理由となっている。

さて、表5-3は、「今年の夏休みに入る前、何かやりたいことを決めていましたか。」という設問により、夏休みにやりたいこととか取り組む目標、あるいは、夏休みの過ごし方にかかわる計画性について聞いている。この数値を学年別にみると、有意差がみられる。4年生、6年生、5年生の順に「決めていた」と答える子どもが多い。また、楽しかったかどうかとの関連でも、有意差がある。夏休みを「楽しかった」と捉える子どもほど、「決めていた」と答える子どもが多い。そして、統計的に有意差が最も大きいのは、自己採点の得点別である。

「90点以上」を付けた子どもでは、「決めていた」と答えた子どもは41.6%であり、「70~89」点の子どもは35.3%、「69点以下」の子どもでは、25.4%と数値が低くなっている。つまり、何らかの取り組みたい事柄や目標を持って夏休みを送った子どもほど、夏休みの送り方に高い自己評価をしていることがわかる。

なお、具体的にはどのようなことをやりたいこととして決めていたのか。自由記述欄への回答からみておく。まず、4年生からみる。男子では、「午前中は勉強する」「きちんと勉強する。犬や生き物の世話をする。」「いっぱい泳げるようにする」「早めに自由研究をすること」「海に行くこと」「海で泳げるようになること」「サッカーの大会でゆうしょう」「外でいっぱい遊びたいと決めていた」「友達と遊ぶ」「友達と遊びまくる」「家族で旅行に行くこと」「カブト虫をかう」など。他方、女子では、「文字のけいこをする」「理科の自由研究と、読書かんそう文を

表5-3 夏休みに入る前に、何かやりたいことを決めていましたか。

	(学 年 別)			(自 己 採 点)			(夏休みの感想)		
	4 年 生	5 年 生	6 年 生	90点以上	70~89	69点以下	大変楽しかった	まあまあ楽しかった	あまり・全く楽しなかった
決めていた	39.0	29.5	33.2	41.6	35.3	25.4	37.0	29.7	25.5
決めていなかった	61.0	70.5	66.8	58.4	64.7	74.6	63.0	70.3	74.5
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

$\chi^2=7.30$

df = 2

p<.05

$\chi^2=20.30$

df = 2

p<.0001

$\chi^2=7.78$

df = 2

p<.05

ぜったいやる」「本をたくさん読む」「自由研究」「フェスティバルに出る」「かん字れん習」「ねこのけんきゅうをしてねこのことをもっとしろうとおもった!」「とうけいグラフ、文字のけいこ、ドリル」「文字ドリル、漢字ドリル」「海で遊ぶ」「プールに行くこと、一輪車の練習」「家の人の手伝いをする」「私の家には、たなが少ないのでたなをつくと決めていました」「おばあちゃんと2人だけでひこうきにのる」「ロッキー、バンクーバー、シャーロットタウンに行くこと」「家の近くに海がないから、おばあちゃんの家に行ってたくさん海で泳ぐ」などである。

つぎに、5年生をみる。女子では、「社会が苦手なので、社会の問題集を買ってやること」「自由研究」「本をたくさん読むこと」「プールで50m泳ぐ」「バスケット」「部活は毎日行く」「おかし作り」「エプロン作り」「手伝いをする」「家族と旅行に行く」「工作をつくる」「友達と思いっきり遊ぶ、おばあちゃんを喜ばす」「一人でたいていの料理を作れるようになる。」「一日少しずつでも本を読む」「早寝早起きをする」「読書感想文」「みんなで楽しく旅行をすること」「自由研究」「自由研究、習字、アイデア貯金箱」「楽しくて元気にすごす」など。他方、男子では、「25m泳ぐ」「ファミコンはぜったいにする」「生き物を育てる」「友達といっぱいあそぶこと」「ミニ四駆のレースに出ること。思いっきり遊ぶこと」「お父さんと海で泳ぐこと」「親の手伝いをたくさんする」「釣りでブラバス30cm級を釣る」「読書」「遊んで遊んで遊びまくる」「ゲームカセットを全面クリアする」「マンガをほしいものを全て集める」などである。

最後に、6年生をみる。男子では、「泳ぎに行くこと」「文字や算数をがんばる」「自由研究」「ハムスターの見合い」「早ね早おき」「水泳で100mを泳ぎきること」「手伝い、サッカー」「自由研究」「サッカーの技術、勉強、文字の練習」「一日漢字3つ」「一人旅」「海や川で高いところから飛び込みをする」「マンガをすべて読み直す」「バスケの試合で勝つ」「本を読みまくること、ファミコンをする」「友達と遊ぶ」「思うぞんぶん遊ぶこと」「一日中マンガを読むこと。一日中ファミコンをすること」「海で魚をつかまえる」「毎日、今までの復習をする」「1学期中に、忙しくて、できなかった家庭学習など」「本読み」「スポーツをする」などである。他方、女子では、「毎日、何分でもいいからピアノの練習をきちんと忘れずにする」「アイデア料理作り」「規則正しい生活をする」「友達と1日でも楽しく町へ行く」「毎日なわとびをする」「毎日、日記を書く」「海で泳ぐ」「水泳の記録をのばす」「海やプールに行く」「おかし作り」「勉強をがんばる」「部活をまじめに休まずする」「海やプールなどであそぶ」「自由研究、国、算、社、理、英のテキストをやりとげる」「パソコンのサウンドレコーダー」「工作や自由研究など」「マンガを書く、マンガ本を買う。スーフファミのソフトを全クリする」「手伝い」「勉強」「作文を書く」などである。以上、重複しているものは除くようにしたが、遊びを中心に、自由研究や復習を中心とした勉強、生活の送り方などが記されている。

ところで、表3から、夏休みが「もっと長い方がよい」が約8割に達しており、表4から、「大変楽しかった」と答えた子どもが約6割に近い。そして、夏休みのすごし方は、100点満点で自己採点すると「90点以上」を付けた子どもは約3割であることがわかった。そして、学年が進行するにつれて、楽しさの程度は減少して、自己採点も低下していることがわかった。

2) 夏休みの過ごし方

では、なぜ「楽しさ度」や自己採点が学年の進行とともに低下するのか。前年度の調査報告

夏休みにおける子どもの生活体験（2）

では、体験活動との関連から分析を加えたが、今回は、この問題を楽しさの程度と自己採点の得点との関連からみていく。

小学生は夏休みをどのように過ごしているのか。過ごし方をみていくことにする。まず、夏休みの生活の過ごし方に関して、表6-1では、計画性とか、生活リズムを取り上げ、「早寝早起きをし、規則正しい生活ができたか」という設問で聞いた。結果をみると、全体では、「毎日できた」は14.9%、「だいたい毎日できた」は45.5%、「あまりできなかった」は39.6%である。「毎日」と「だいたい毎日」を合わせると、できている子どもは約6割である。「楽しさ度」との関連でみると、有意差が認められる。「大変楽しい」と答えた子どもでは、「毎日できた」が17.4%、「だいたい毎日」が48.4%と計65.8%。つまり、夏休みを楽しいと感じた子どもの方が、一定の生活リズムを持って夏休みを過ごしている。

また、自己採点との関連でも、有意差が認められる。すなわち、高い得点を付けた子どもほど、一定の生活リズムを持って夏休みを過ごしている傾向がみられる。すなわち、「90点以上」を付けた子どもは「毎日できた」が21.0%、「だいたい毎日」が50.0%と計71.0%。これに対して、「69点以下」を付けた子どもは「毎日できた」が11.4%、「だいたい毎日」が36.4%と計47.8%である。一定の生活リズムのある生活を送ったと考える子どもほど、自己採点の得点も高く付けている。

表6-2では、「一人でよく遊んだ」という設問への回答である。結果をみると、全体では、「よく遊んだ」が19.1%、「まあまあ遊んだ」が44.2%であり、「あまり遊ばなかった」は36.8%である。「楽しさ度」との関連では有意差がみられない。一人で遊ぶかどうかとはほと

表6-1 早寝早起きし、規則正しい生活ができた

	夏休み、楽しかったか？			夏休みの過ごし方は何点？			全 体
	大変楽しい	まあまあ	楽しくない	90点以上	70～89	69点以下	
毎日できた	17.4	11.0	16.1	21.0	13.7	11.4	14.9
だいたい毎日	48.4	41.5	42.9	50.0	49.9	36.4	45.5
あまりできなかった	34.2	47.5	41.1	29.0	36.4	52.2	39.6
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	$\chi^2=21.74$ df=4 p<.001			$\chi^2=45.16$ df=4 p<.0001			

表6-2 一人でよく遊んだ

	夏休み、楽しかったか？			夏休みの過ごし方は何点？			全 体
	大変楽しい	まあまあ	楽しくない	90点以上	70～89	69点以下	
よく遊んだ	20.0	16.9	25.0	22.8	14.4	20.9	19.1
まあまあ遊んだ	45.1	43.2	41.1	42.8	46.4	43.1	44.2
あまり遊ばなかった	34.9	39.9	33.9	34.4	39.2	36.0	36.8
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	$\chi^2=4.59$ df=4			$\chi^2=9.98$ df=4 p<.05			

んど関係がないと言える。他方、過ごし方の自己採点との関連では、統計的には少し差がみられた。「70～89」の中間グループが、遊ばなかったと答えた比率がわずかに高い。

表6-3では、「友達とよく遊んだ」という設問への回答である。結果をみると、全体では、「よく遊んだ」が58.4%、「まあまあ遊んだ」が26.2%であり、「あまり遊ばなかった」は15.4%である。なお、表6-2の一人遊び比べて、友達とはよく遊んでいることがわかる。「楽しさ度」との関連では、有意差がみられる。すなわち、「大変楽しい」と答えた子どもでは、「よく遊んだ」が63.6%、「まあまあ遊んだ」が24.6%と計88.2%。これに対して、「楽しくない」と答えた子どもは、「よく遊んだ」が48.2%、「まあまあ遊んだ」が21.4%と計69.6%である。夏休みが楽しいと感じる程度と友達とよく遊んだという程度とは相関が高い。しかし、過ごし方の自己採点の間では有意差は認められない。このことから、「遊び」という活動を、子どもは夏休みの過ごし方についての評価尺度の中ではあまり重要視していない、と言えよう。

表6-3 友だちとよく遊んだ

	夏休み、楽しかったか？			夏休みの過ごし方は何点？			全 体
	大変楽しい	まあまあ	楽しくない	90点以上	70～89	69点以下	
よく遊んだ	63.6	51.9	48.2	62.9	57.3	56.6	58.4
まあまあ遊んだ	24.6	29.1	21.4	23.4	28.1	25.9	26.2
あまり遊ばなかった	11.8	19.0	30.4	13.8	14.6	17.5	15.4
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

$$\chi^2=26.77$$

$$df=4$$

$$p<.0001$$

$$\chi^2=4.74$$

$$df=4$$

表6-4では、「塾や家でよく勉強した」という設問への回答である。結果をみると、全体では、「よくした」が22.0%、「まあまあした」が49.5%であり、「あまりしなかった」は28.5%である。「楽しさ度」との関連では、少し有意差がみられる。すなわち、「大変楽しい」と答えた子どもでは、「よくした」が23.4%、「まあまあした」が50.5%と計73.8%。これに対して、「まあまあ楽しい」と答えた子どもは、「よくした」が18.5%、「まあまあした」が50.0%と計68.5%、「楽しくない」と答えた子どもは、「よくした」が33.9%、「まあまあした」が32.2%と計66.1%である。つまり、とくに一定の傾向は読みとれないが、特徴として、「楽

表6-4 塾や家でよく勉強をした

	夏休み、楽しかったか？			夏休みの過ごし方は何点？			全 体
	大変楽しい	まあまあ	楽しくない	90点以上	70～89	69点以下	
よくした	23.4	18.5	33.9	30.8	20.0	15.6	22.0
まあまあした	50.5	50.0	32.2	45.8	58.7	42.2	49.5
あまりしなかった	26.1	31.5	33.9	23.4	21.3	42.2	28.5
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

$$\chi^2=13.14$$

$$df=4$$

$$p<.05$$

$$\chi^2=64.40$$

$$df=4$$

$$p<.0001$$

しくない」と答えた子どもの場合、「よくした」、「まあまあした」、「あまりしなかった」が均等に分かれており、「よくした」の比率も、「あまりしなかった」の比率も、ともに最も高い。

他方、過ごし方の自己採点との間では有意差が認められる。点数の高い子どもほど、塾や家でよく勉強したと答える傾向がみられる。すなわち、「90点以上」を付けた子どもは「よくした」が30.8%、「まあまあした」が45.8%。「70～89」を付けた子どもは「よくした」が20.0%、「まあまあした」が58.7%。これに対して、「69点以下」を付けた子どもは「よくした」が15.6%、「まあまあした」が42.2%である。

この結果から、勉強をしたかどうかということは、夏休みが楽しかったかどうかという問題とはそれほど高い相関はないが、「夏休みの過ごし方の採点」とはかなり高い相関がみられた。このことは、子どもの夏休みの生活において、夏休みを有意義に過ごせたかどうかとか、充実していたかどうかという問題は、「勉強をした」かどうかという点とは関連していることがわかる。

表6-5では、「今までやりたいと思っていたことができた」という設問への回答である。結果をみると、全体では、「たくさんできた」が24.0%、「まあまあできた」が51.7%であり、「あまりできなかった」は24.3%である。「楽しさ度」との関連では、有意差がある。すなわち、「大変楽しい」と答えた子どもでは、「たくさんできた」が34.1%、「まあまあできた」が49.3%と計83.4%。これに対して、「まあまあ楽しい」と答えた子どもは、「たくさんできた」が11.3%、「まあまあできた」が56.8%と計68.1%。「楽しくない」と答えた子どもは、「たくさんできた」が7.1%、「まあまあできた」が39.3%と計46.4%である。つまり、「楽しさ度」別にみて差が大きい。

他方、過ごし方の自己採点との間でも有意差が認められる。点数の高い子どもほど、やりたいと思っていたことができたと答える傾向がみられる。すなわち、「90点以上」を付けた子どもは、「たくさんできた」が36.2%、「まあまあできた」が51.2%と計87.4%。「70～89」を付けた子どもは、「たくさんできた」が20.0%、「まあまあできた」が56.4%と計76.4%。「69点以下」を付けた子どもは、「たくさんできた」が18.3%、「まあまあできた」が47.1%と計65.4%と、得点別にみて差が大きい。なお、どのようなことをやりたいことと考えているかの問題については、以下の項で取り上げる。

表6-5 今までやりたいと思っていたことができた

	夏休み、楽しかったか？			夏休みの過ごし方は何点？			全 体
	大変楽しい	まあまあ	楽しくない	90点以上	70～89	69点以下	
たくさんできた	34.1	11.3	7.1	36.2	20.0	18.3	24.0
まあまあできた	49.3	56.8	39.3	51.2	56.4	47.1	51.7
あまりできなかった	16.6	31.9	53.6	12.6	23.6	34.6	24.3
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	$\chi^2=112.60$			$\chi^2=65.79$			
	df=4			df=4			
	p<.0001			p<.0001			

表6-6では、「夏休みでないとできない思い出がたくさんできた」という設問への回答である。結果をみると、全体では、「たくさんできた」が50.2%、「まあまあできた」が36.7%で

表6-6 夏休みでないとできない思い出ができた

	夏休み、楽しかったか？			夏休みの過ごし方は何点？			全 体
	大変楽しい	まあまあ	楽しくない	90点以上	70～89	69点以下	
たくさんできた	64.2	32.6	25.0	63.5	48.7	39.0	50.2
まあまあできた	28.3	50.5	26.8	30.5	37.8	42.2	36.7
あまりできなかった	7.5	16.9	48.2	6.0	13.5	18.9	13.1
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	$\chi^2=116.39$ df=4 p<.0001			$\chi^2=48.99$ df=4 p<.0001			

あり、「あまりできなかった」は13.1%である。「楽しさ度」との関連では、有意差がある。すなわち、「大変楽しい」と答えた子どもでは、「たくさんできた」が64.2%、「まあまあできた」が28.3%と計92.5%。これに対して、「まあまあ楽しい」と答えた子どもは、「たくさんできた」が32.6%、「まあまあできた」が50.5%と計83.1%、「楽しくない」と答えた子どもは、「たくさんできた」が25.0%、「まあまあできた」が26.8%と計51.8%である。つまり、「楽しさ度」別にみて差が大きい。

他方、過ごし方の自己採点との間でも有意差が認められる。点数の高い子どもほど、夏休みでないとできない思い出がたくさんできたと答える傾向がみられる。すなわち、「90点以上」を付けた子どもは、「たくさんできた」が63.5%、「まあまあできた」が30.5%と計94.0%。「70～89」を付けた子どもは、「たくさんできた」が48.7%、「まあまあできた」が37.8%と計86.5%。「69点以下」を付けた子どもは、「たくさんできた」が39.0%、「まあまあできた」が42.2%と計81.2%と、得点別にみて差が大きい。

この結果は、夏休みでないとできないようなことをすることが、楽しさをつくり出していること、また、小学生の夏休みの生活を振り返っての思い出として強く残ることを示している。とくに今日の子どもの夏休みの過ごし方として、家族で海や山、あるいは行楽地、県外や海外へと旅行をすることが多いが、こうした状況を反映した数値でもある。

表6-7では、「親からうるさく言われた」という設問への回答である。結果をみると、全体では、「すごく言われた」が16.8%、「まあまあ言われた」が36.4%であり、「あまり言われなかった」は46.8%である。「楽しさ度」との関連では、有意差がある。すなわち、「大変楽しい」と答えた子どもでは、「すごく言われた」が14.9%、「まあまあ言われた」が35.5%と計

表6-7 親からうるさく言われた

	夏休み、楽しかったか？			夏休みの過ごし方は何点？			全 体
	大変楽しい	まあまあ	楽しくない	90点以上	70～89	69点以下	
すごく言われた	14.9	17.4	33.9	13.5	13.8	24.2	16.8
まあまあ言われた	35.5	38.5	30.4	32.0	38.2	38.8	36.4
あまり言われなかった	49.6	44.1	35.7	54.5	48.0	37.0	46.8
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	$\chi^2=15.50$ df=4 p<.01			$\chi^2=29.70$ df=4 p<.0001			

50.5%である。逆に、「楽しくない」と答えた子どもは、「すごく言われた」が33.9%、「まあまあ言われた」が30.4%と計64.4%である。

他方、過ごし方の自己採点との間でも有意差が認められる。点数の高い子どもほど、親からうるさく言われる傾向が少ないことがわかる。すなわち、「90点以上」を付けた子どもは、「すごく言われた」が13.5%、「まあまあ言われた」が32.0%と計45.5%である。逆に、「69点以下」を付けた子どもは、「すごく言われた」が24.2%、「まあまあ言われた」が38.8%と計63.0%と、得点別にみて差が大きい。なお、充実した生活を送るから、親からうるさく言われないのか。親からうるさく言われないから、充実した生活を送ることができているのか。こうした、夏休みにおける親子関係の現状の解明やその関係のあり方を検討していくことも、今後の課題の1つである。

表6-8では、「ひまだった」という設問への回答である。結果をみると、全体では、「すごくひまだった」が8.9%、「まあまあひまだった」が55.9%であり、「忙しかった」は35.1%である。「楽しさ度」との関連では、有意差がある。すなわち、「大変楽しい」と答えた子どもでは、「すごくひまだった」が7.7%、「まあまあひまだった」が53.2%と計60.9%である。逆に、「楽しくない」と答えた子どもは、「すごくひまだった」と答えた比率が25.0%と高い。

他方、過ごし方の自己採点との間でも有意差が認められる。点数の高い子どもほど、ひまが少ないと答える傾向のあることがわかる。すなわち、「90点以上」を付けた子どもでは、「忙しかった」を選択したものが多くて43.7%、「70~89」を付けた子どもは、「忙しかった」が35.0%、「69点以下」を付けた子どもは、「忙しかった」が27.9%である。

このことから、夏休みの生活が「ひまだった」と答える子どもは、楽しさも少なく、自己評価の点でも低い傾向にあることがわかる。夏休みは、ゆとりをもつとか、ゆったりと過ごすといった生活のし方は、今の子どもには望ましいとは考えられていないようである。

表6-8 ひまだった

	夏休み、楽しかったか？			夏休みの過ごし方は何点？			全 体
	大変楽しい	まあまあ	楽しくない	90点以上	70～89	69点以下	
すごくひまだった	7.7	8.7	25.0	8.7	4.9	14.0	8.9
まあまあひまだった	53.2	62.0	41.1	47.6	60.1	58.1	55.9
忙 し か っ た	39.1	29.3	33.9	43.7	35.0	27.9	35.1
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	$\chi^2=30.20$			$\chi^2=35.63$			
	df = 4			df = 4			
	p<.0001			p<.0001			

3) 夏休みにおける体験

(1) 楽しかった体験のなかみ

次に、夏休みに行った体験についてみていくことにする。表7は、「今年の夏休みにした体験の中で、楽しかったことは何ですか。」という設問への回答結果を、回答率の高い順に示したものである。表では、学年別、男女別、楽しさ度、自己採点別に有意差の有無を示している。また、有意差が認められた場合には、回答比率の高い方を括弧の中に示している。例え

表7 夏休みに行った体験の中で、楽しかったこと

順位		回答率	学 年 別	男 女 別	楽しさ度別	自己採点別
1	水泳 (プール・海)	76.8		p<.0001(女)	p<.0001(大)	p<.001 (高)
2	テレビ	58.7				
3	ファミコン	57.1		p<.0001(男)		p<.01 (高)
4	祖父母の家に行く	46.9		p<.01 (女)	p<.01 (大)	
5	サッカー, バスケ, ソフト	39.0		p<.0001(男)		
6	つり	29.8		p<.0001(男)	p<.01 (大)	p<.01 (高)
7	音楽をきく	27.4		p<.0001(女)		
8	料理をつくる	26.6	p<.0001(5年)	p<.0001(女)		
9	キャンプ	23.0				
10	国内旅行	22.5				p<.01 (高)
11	おかし作り	21.8	p<.01 (5年)	p<.0001(女)		
12	スポーツ大会への参加	21.0	p<.01 (6年)	p<.0001(男)		p<.001 (高)
13	虫取り	18.8	p<.0001(4年)	p<.0001(男)	p<.001 (大)	
14	県外の遊園地へ行く	17.6			p<.01 (大)	
15	おにごっこ	16.4	p<.01 (4年)			
16	パソコン	15.6	p<.01 (4年)			
17	探検	10.7		p<.05 (男)	p<.0001(男)	p<.01 (高)
18	かくれんぼ	10.6	p<.0001(4年)			
19	楽器の演奏	8.1		p<.0001(女)		
20	木登り	7.4		p<.001 (男)		
21	スケボー	6.7	p<.01 (5年)	p<.001 (男)		
22	土・砂・どろ遊び	6.1	p<.0001(4年)		p<.001 (大)	
23	人形遊び	6.0	p<.0001(4年)	p<.0001(女)	p<.001 (大)	p<.001 (高)
24	音楽会に出る	5.9		p<.0001(女)		
25	海外旅行	3.5				p<.01 (高)

ば、楽しかった体験のうち、第1位の回答率は、「水泳 (プール・海)」である。確かに、夏休みと水泳は昔から切り離せない。海に行ったり、川に行ったり、行楽地の大きなプールに行ったりと水泳の機会は多い。男女別に有意差があり、女子の比率が高い。「楽しさ度別」でも有意差があり、「大変楽しい」と答えた子どもの方の回答率が最も高い。「自己採点別」でも有意差があり、「90点以上」を付けた子どもの方が回答率が最も高い。

第2位の回答率は、「テレビ」である。特徴的なのは、学年別、男女別、楽しさ度別、自己採点別にみて、どれも有意差は認められないことである。言いかえると、学年を越えて、男女に関係なく、夏休みが楽しかったかどうかに関係なく、また得点に関係なく、「テレビ」が楽しい体験と答えている子どもが多いことである。もちろん、日頃忙しくてテレビを見れないために夏休みに集中して見たというよりも、むしろ、他にすることを見いだせず、テレビを楽しんだ子どもも多いのではないだろうか。

第3位は、「ファミコン」である。男子が、また、得点の高い子どもの方が回答率が高い。以上の3つの体験は、全体でみて半数以上の子どもが回答している。

なお、この表に示している体験のなかで、有意差が多くみられるのは、男女別である。小学生の場合、男子が楽しかったとする体験と、女子が楽しかったとする体験にはかなり差がみられる。例えば、有意差が認められ、男子が楽しかったとする体験は、「サッカー、バスケ、ソフト」「つり」「スポーツ大会への参加」「虫取り」「探検」「木登り」「スケボー」など、屋外の

身体を動かす体験が多い。これに対して、女子は、「水泳」「祖父母の家に行く」「音楽をきく」「料理をつくる」「おかし作り」「楽器の演奏」「人形遊び」「音楽会に出る」といった屋内での活動への回答率が高い。

また、楽しさ度、自己採点別にみて有意差が認められたものには、次のような特徴がある。それは、楽しさ度では、夏休みが楽しかったと答えた子どもの方が、そうでないと答える子どもに比べて、回答率の高い体験が多いことがわかる。例えば、その体験として、「水泳」「祖父母の家に行く」「サッカー、バスケ、ソフト」「虫取り」「探検」などがある。同様に、自己採点別にみても、高い得点を付けた子どもの方が、低い得点を付けた子どもに比べて、回答率の高い体験が多いことがわかる。例えば、その体験として、「水泳」「ファミコン」「サッカー、バスケ、ソフト」「スポーツ大会への参加」などがある。

次に、表7-2は、夏休みに行った体験のなかで、楽しかったことを通して感じたことを示している。すなわち、「体験を通して、どのようなことを感じましたか。」という設問に、表に示した14項目の選択肢を用意した。表では、学年別、男女別、楽しさ度、自己採点別に有意差の有無を示している。また、有意差が認められる場合に、回答比率の高い方を示している。

感じたことの第1位は、「したいと思っていたことができた」である。第2位が「一生懸命できた」である。ともに選択率は40%を越えている。30%台の選択率は「十分満足した」「知らないことを知った」である。20%台の選択率は「一人でやり遂げることができた」「人と助け合うことができた」「自分で考え、思い通りにできた」「自然の美しさや大切さを感じた」である。

結果の特徴として、まず、男女別では、有意差がみられたのは、「自然の美しさや大切さを感じた」と「わざ(技能)が向上した」の2項目に過ぎない。「感じたこと」には、男女差がないことがわかった。学年別では、有意差が認められたのは5項目であり、その中では、学年段階の低い4年生の選択率が高い傾向にある。そして、「楽しさ度」と「自己採点別」では多くの項目で有意差が認められる。とくに「自己採点別」では、すべての項目で有意差が認められる。このことは夏休みの自己採点で、高得点を付けた子どもほど体験を通して多くのことを感じていることがわかる。

表7-2 夏休みに行った体験の中で、楽しかったことを通して感じたこと

順位		回答率	学年別	男女別	楽しさ度別	自己採点別
1	したいと思ったことができた	44.2	p<.01 (4年)		p<.0001(大)	p<.0001(高)
2	一生懸命できた	40.1				p<.0001(高)
3	十分満足した	38.7	p<.0001(4年)		p<.01 (大)	p<.0001(高)
4	知らないことを知った	32.2				p<.0001(高)
5	一人でやり遂げれたこと	23.4				p<.0001(高)
6	人と助け合うことができた	23.2				p<.001 (高)
7	自分で考え、思い通りにできた	21.7				p<.0001(高)
8	自然の美しさや大切さを感じた	20.8	p<.0001(5年)	p<.01 (女)	p<.01 (大)	p<.0001(高)
9	つらいことも我慢できた	19.3	p<.0001(4年)	p<.001 (男)	p<.01 (大)	p<.001 (高)
10	わざ(技能)が向上した	18.7	p<.001 (高)			
11	自分なりにいろいろ工夫した	16.7	p<.01 (高)			
12	一層やる気になった	15.5	p<.0001(4年)		p<.01 (大)	p<.001 (高)
13	不思議だと思った	13.9				p<.001 (高)
14	感動した	13.2				p<.001 (大)

そして、表8は、「どこを変えたら、もっと楽しい夏休みを過ごせたいと思いますか。」という設問に、表に示した12項目の選択肢を用意した。表では、学年別、男女別、楽しさ度、自己採点別に有意差の有無を示している。また、有意差が認められる場合に、回答比率の高い方を示している。

変えたい点の第1位は、「もっといろんな所へ行けたら」で、51.1%である。学年別と男女別に有意差がある。学年別では学年の低いほど、男女別では女子の方が比率が高い。旅行など家を離れての体験は小学生の最も好む体験である。

なお、2位の「宿題を早くすませたら」が50.3%、3位の「もっと自分の好きなことができたなら」が46.1%、4位の「もっと友だちと遊べたら」が34.8%、5位の「計画的に行動したら」が27.6%であり、学年別にも、男女別にも、楽しさ度別にも、自己採点別にも有意差がみられなかった。これらの項目はどの子どももが求めていると予測できる。

また、6位の「もっと家族の人と遊べたら」7位の「親からしかられなかったら」8位の「もっと外で遊べたら」は、学年の低い4年生の回答率が高い傾向がみられる。

これに対して、9位の「規則正しい生活をしたら」には回答率が低かった(16.1%)。多くの子どもは、この「規則正しい」を夏休みの生活の目標としているが、この目標を達成できたからといって夏休みの生活が楽しく過ごせたと、いう次元とはあまり関係ないと捉えている。

表8 どこを変えたら、夏休みをもっと楽しく過ごせたいか

順位		回答率	学 年 別	男 女 別	楽しさ度別	自己採点別
1	もっといろんな所へ行けたら	51.1	p<.001 (4年)	p<.01 (女)		
2	宿題を早くすませたら	50.3				
3	もっと自分の好きなことができたなら	46.1				
4	もっと友だちと遊べたら	34.8				
5	計画的に行動したら	27.6				
6	もっと家族の人と遊べたら	23.5	p<.0001(4年)			
7	親からしかられなかったら	22.3	p<.0001(4年)			
8	もっと外で遊べたら	21.2	p<.0001(4年)	p<.001 (男)		
9	規則正しい生活をしたら	16.1			p<.01 (大)	
10	登校日がなければ	15.5			p<.0001(小)	
11	けがをしなかったら	14.6	p<.0001(4年)			p<.001 (高)
12	もっと行事があれば	13.4				
13	とくに変えるところはない	7.3			p<.001 (大)	p<.01 (高)

(2) 自由記述にあらわれた体験のなかみ

小学生はどのようなこと(体験)を求めているのか。そこで、「今年の夏休みの中で最も心に残っていること」を自由記述で求めた。小学生にとっての夏休みにおける楽しい出来事として何が心に残るのかという問題をみていくことにする。

まず4年生の男子からみていく。「父さんと海に行った」「空手で全国大会に行った」「友だちと遊んだ」「家族で旅行に行った」「カブトムシをかったこと」「キャンプに行くとまったこと」「友だちと山に行ったこと」「いろんな所に遊びに行ったこと」「レオマワールドに友だちと行った」「家族でキャンプをしながら花火をみたこと」「きじまゆうえんちに行って夕方まで遊んだこと」「海に泳ぎに行った」「剣道のしあいで3回せんまで勝ち続けたこと」「川で

泳いだ」「大阪で宝塚に行ったこと」「みんなでプールに行ったこと」「友だちと遊んだこと」「外でよく遊べたこと」「東京ドームに行ったこと」「海で遊んだこと」「甲子園，でっかいプールに行ったこと」「モルモットが死んだこと」「ドッチボール大会の優勝」「トンボ博物館でいろいろなトンボをみたこと」「カブトガニを見に行き、成長の仕方がすごかったこと」「はじめてキャンプに行き釣りをしたこと」「海に行き貝がら拾いをしたこと」「合宿」などである。なお、「勉強をちょっとしかなかったこと」も記されていた。

4年生の女子では、「きんかんバンドでえんそうしたこと」「海で泳げなかった。花火があまりみられなかった。」「川の深いところで飛び込みをした」「れきしはくぶつかんに行った」「みんなで旅行に行った」「友だちとプールで遊んだ」「キャンプをしたこと」「お母さんとはるちゃんまで、おにごっこをした」「あまみに行った」「海の沖の方までお父さんと行ってとても楽しかった」「ヨットに乗った」「魚釣り」「宮島へ行ってしかと遊んだ」「手術をしたこと」「お父さんにプールにつれていってもらったこと」「おばあちゃんの所に行ったこと」「友だちと海へ行ったこと」「海へ行ってバーベキューをしたこと」「いとことスライダープールに行ったこと」「スポーツ少年団に入ったこと」「釣りに行ったこと」「おばあちゃんの家に行ったこと」「今かっているリスにエサをあげていると、おしっこをかけられたこと」などである。

5年生の男子では、「旅行に行ったこと」「少年自然の家に行ったこと」「将棋大会で優勝した」「剣道の試合」「プールでいっぱいあそんだこと」「家族でレオマワールドに行ったこと」「お父さんと2人で長野県に行ったこと」「映画やプールに行ったこと」「友達といっぱい遊んだこと」「甲子園に行った」「ファミコン，ミニ四駆で遊んだこと」「ソフト部でごご島に行ったこと」「山登り」「川に行ったこと」「カップ大会に行ったこと」「ぶどうがり」「部活」「海で泳いだこと」「キャンプ」「お父さんに泳ぎを教えてもらったこと」「よく寝た，よくファミコンをした」「よくテレビを見た」「きもだめしをした」「サッカーの試合」「シーガイアに行って泳いだこと」などである。

5年生の女子では、「家族でキャンプに行ったこと」「旅行に行ったこと」「友達と映画を見たり，いとこと海に行ったこと」「友達やいとこと旅行に行ったこと」「音楽会，川，山にキャンプに行ったこと」「おばあちゃんちに泊まりに行ったこと」「少年自然の家ですごしたこと」「いとこと海に行ってマリジェットに乗ったこと」「旅行に2回行けたこと」「遊園地に行ったこと」「おばあちゃんちで花火をしたこと」「海で泳げた」「高知に行ったこと」「家族でキャンプに行ったこと。ピアノのコンクールに出たこと」「自由研究をしたこと」「部活の人と川へ行った」「引っ越しをしたこと」などである。

6年生の男子では、「釣り，友達とよく遊んだこと」「サッカーで合宿に行ったこと」「家族で旅行に行ったこと」「国民宿舎に泊まりに行ったこと」「恐竜展」「近所の家族といっしょに川へ行ったこと」「キャンプとミニ四駆の大会への参加」「東京に旅行」「旅行に行ったこと」「釣りに行ったこと」「花火を見に行き行ったこと」「友達がとまりに來たり，とまりに行ったこと」「祖父母の家に行ったこと」「スポ少の練習をよくがんばったこと」「友達とよく遊んだこと，兄と釣りに行ってはじめてバスが釣れたこと」「川で泳げたこと」「サッカーのむずかしいフェイントができた」「ソフトで合宿に行ったこと」「友達とプールに行ったこと」「一人でじいちゃんちに遊びに行ったこと」「海や川で高いところから飛び込めた」「バスケの試合で負けてくやしい気持ち」「父さんが遊んでくれた」「ジェットコースターに一回乗ってしまった」「塾がいやでいやでたまらなかった」「ごろごろしたこと」などである。

6年生の女子では、「家族で出かけたり、おじいちゃん、おばあちゃんの家に行ってお祭りに行ったこと」「家族で旅行に行ったこと」「スポ少の友達と川に行ったこと、おばあちゃんの家に行き、いとこと遊んだこと」「本をたくさん読めて、手芸をする時間があったので良かった」「友達といろいろなところに行き物に行けたこと」「友達となかよく遊んだこと」「おばあちゃんといっしょに、お料理や、おかし作りや遊んだりしたこと」「キャンプに行ったこと」「友だちや家族、親せきといっしょに遊園地に行ったこと」「イカすくいをしたこと」「みんなと海へ行ったこと」「部活を休まず行ったこと」「友だちの家で泊まったこと。金管でフェスティバルに出たこと」「金管の大会」「水泳大会に出た」「お祭りを友だちと行ったこと」「友だちと海へ行ったこと、探検したこと」「船釣りをした」「映画を見に行った」「沖縄旅行をした」「部活での優勝」「海でつかみ取りや飛び込みをしたこと」「ゆっくりできたこと」「東京のいところよく遊べた」「部活で行った合宿」「花火大会」「食中毒がはやったこと」などである。

以上の自由記述は、各学年4学級から無作為に書き出したものである。もちろん、すべての子どもが記入している訳でもないし、「ない」と答える子どもも少なからずいた。また、内容の重複しているものはできるだけ除外している。その中で、特徴的なことは、「旅行に行ったこと」がどの学年でも最も多い。重複も最も多い。同様に、キャンプとか、祖父母の家に行くこととか、友だちの家で泊まるなど、自分の家以外で泊まることを心に残る思い出としている。その他は、友だちと遊ぶ、映画に行く、釣りに行く、花火を見に行く、小動物を飼育する、家族で遊ぶなどが多い。学校生活の延長上のものとしては、部活での大会参加や合宿、自由研究への取り組みなどである。

4) 夏休みの自己採点と「教科」

次に、夏休みの自己採点が夏休みにおける学習とどのように関係しているのかをみておく。まず、学習の量的な側面との関連をみる。表9は、「もっともよく勉強した日には、塾の時間も合わせて何時間ぐらい勉強しましたか。」という設問との関連からみた。さて、自己採点に影響するものは、昨年度の調査では、夏休みの体験の質と量であることがわかったが、ここでは、勉強や「教科」学習との関連をみておくことにする。

結果をみると、学年別にみて有意差はない。確かに、最もよく勉強した日には、6年生では3時間以上の勉強をしている者の比率は29.2%であり、他の学年に比べて数値は高い。自己採点別にみると、有意差がみられ、得点の高い子どもほど勉強時間も長いという傾向がみられ

表9 自己採点得点と家庭（塾を含む）での勉強時間（最も多い日）

	(学 年 別)			(自 己 採 点)		
	4 年 生	5 年 生	6 年 生	90点以上	70 ~ 89	69点以下
1時間以内	17.7	24.3	18.8	19.4	18.2	23.8
2時間以内	37.2	30.9	30.0	26.6	35.8	34.4
3時間以内	21.0	21.5	22.0	21.7	23.6	19.9
181分以上	24.1	23.3	29.2	32.3	22.4	21.9
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

$$\chi^2 = 10.69$$

$$df = 6$$

$$\chi^2 = 18.07$$

$$df = 6$$

$$p < .01$$

る。例えば、「90点以上」の点数を付けた子どもでは、3時間以上の勉強をしている者の比率は32.3%であり、他方、「69点以下」の点数を付けた子どものその数値21.9%である。このことから、学年を問わず、勉強を量的によくしている子どもほど、夏休みの過ごし方への自己評価でも高い評価を付けていることがわかる。

次に、「教科」学習との関連をみる。教科への「好き嫌い」という点から聞いた。まず、表10-1は、夏休みの過ごし方の自己採点と「理科」の好き嫌いとの関連である。有意差が認められる。「90点以上」を付けた子どもでは、「理科」を「たいへん好き」と答えたのが、31.1%である。これに対して、「69点以下」を付けた子どもでは、「たいへん好き」と答えたのは16.9%と低い。自己得点の高い子どもほど、「理科」学習にも興味を持っていることがわかる。

「社会科」学習との関連をみたのが、表10-2である。理科と同様に、有意差が認められる。「90点以上」を付けた子どもでは、「社会科」を「たいへん好き」と答えたのが、26.9%である。これに対して、「69点以下」を付けた子どもでは、「あまり好きでない」が28.4%、「きらい」が14.0%と多くを占めている。つまり、自己得点の高い子どもほど、「社会科」学習にも興味を持っていることがわかる。

「国語」学習との関連をみたのが、表10-3である。有意差が認められる。「90点以上」を付けた子どもでは、「国語」を「たいへん好き」

表10-1 自己採点得点と「理科」

	(自 己 採 点)		
	90点以上	70 ~ 89	69点以下
たいへん好き	31.1	14.2	16.9
まあまあ好き	46.1	51.7	50.4
あまり好きでない	16.8	27.4	22.2
きらい	6.0	6.7	10.5
計	100.0	100.0	100.0

$$\chi^2 = 45.52$$

$$df = 6$$

$$p < .0001$$

表10-2 自己採点得点と「社会」

	(自 己 採 点)		
	90点以上	70 ~ 89	69点以下
たいへん好き	26.9	14.7	19.3
まあまあ好き	43.7	46.5	38.3
あまり好きでない	21.9	30.0	28.4
きらい	7.5	8.8	14.0
計	100.0	100.0	100.0

$$\chi^2 = 30.59$$

$$df = 6$$

$$p < .0001$$

表10-3 自己採点得点と「国語」

	(自 己 採 点)		
	90点以上	70 ~ 89	69点以下
たいへん好き	24.9	20.5	20.4
まあまあ好き	45.7	49.0	33.9
あまり好きでない	20.4	20.0	26.5
きらい	9.0	15.5	19.2
計	100.0	100.0	100.0

$$\chi^2 = 34.07$$

$$df = 6$$

$$p < .0001$$

表10-4 自己採点得点と「音楽」

	(自 己 採 点)		
	90点以上	70 ~ 89	69点以下
たいへん好き	33.4	40.7	27.8
まあまあ好き	38.6	33.7	32.7
あまり好きでない	16.6	14.0	23.4
きらい	11.4	11.6	16.1
計	100.0	100.0	100.0

$$\chi^2 = 24.95$$

$$df = 6$$

$$p < .001$$

と答えたのが、24.9%である。これに対して、「69点以下」を付けた子どもでは、「あまり好きでない」が26.5%、「きれい」が19.2%と多くを占めている。つまり、自己得点の高い子どもほど、「国語」学習にも興味を持っていることがわかる。

「音楽」学習との関連をみたのが、表10-4である。有意差が認められる。「90点以上」を付けた子どもでは、「音楽」を「たいへん好き」と答えたのが、33.4%である。これに対して、「69点以下」を付けた子どもでは、「あまり好きでない」が23.4%、「きれい」が16.1%と多くを占めている。つまり、自己得点の高い子どもほど、「音楽」学習にも興味を持っていることがわかる。

「体育」学習との関連をみたのが、表10-5である。有意差が認められる。「90点以上」を付けた子どもでは、「体育」を「たいへん好き」と答えたのが、52.7%である。なお、「体育」に関しては、「あまり好きでない」と「きれい」に回答した子どもは少ない。「たいへん好き」への回答率の差が自己得点との間での差に対応している。このために、統計上自己得点の高い子どもほど、「体育」学習にも興味を持っているという結果になっている。

「図画工作」学習との関連をみたのが、表10-6である。有意差が認められるが、「体育」と同様に、統計的には大きな差ではない。「90点以上」を付けた子どもでは、「図画工作」を「たいへん好き」と答えたのが、49.8%であり、「69点以下」の子どものそれは44.0%である。

「家庭科」学習との関連をみたのが、表10-7である。有意差は認められない。ただし、「90点以上」を付けた子どもでは、「家庭科」を「たいへん好き」と答えたのが、44.2%と高く、「69点以下」を付けた子どものそれは32.4%である。ただし、「あまり好きでない」と「きれい」に回答した子どもの比率は、自己得点の差異にかかわらず、ほぼ同じ比率である。

以上の結果から、自己得点との関連では、「理科」、「社会」、「国語」では差が大きい。夏休みの過ごし方の得点の高低とこの3つの教科との関係は深い。次いで差がみられるのが、「音

表10-5 自己採点得点と「体育」

	(自 己 採 点)		
	90点以上	70 ~ 89	69点以下
たいへん好き	52.7	48.3	44.0
まあまあ好き	31.1	29.9	28.6
あまり好きでない	8.7	14.6	17.2
きれいな	7.5	7.2	10.2
計	100.0	100.0	100.0

$$\chi^2 = 14.94$$

$$df = 6$$

$$p < .05$$

表10-6 自己採点得点と「図画工作」

	(自 己 採 点)		
	90点以上	70 ~ 89	69点以下
たいへん好き	49.8	47.8	44.0
まあまあ好き	33.4	30.4	32.0
あまり好きでない	12.3	17.9	15.2
きれいな	4.5	3.9	8.8
計	100.0	100.0	100.0

$$\chi^2 = 14.59$$

$$df = 6$$

$$p < .05$$

表10-7 自己採点得点と「家庭科」

	(自 己 採 点)		
	90点以上	70 ~ 89	69点以下
たいへん好き	44.2	36.3	32.4
まあまあ好き	34.1	41.7	46.1
あまり好きでない	13.7	15.8	13.7
きれいな	8.0	6.3	7.8
計	100.0	100.0	100.0

$$\chi^2 = 10.28$$

$$df = 6$$

楽」,「体育」,「図画工作」である。なお,有意差が認められないのが「家庭科」であった。夏休みの生活の送り方にも,教科の好き嫌いが関係している。

結 語

最後に,本研究から明らかになったことを指摘しておく。

第1に,夏休みは,小学生にとって,「楽しさ」を味わえる期間になっている。学年別にみると,学年段階の低い子どもほど「楽しい」期間となっている。しかし,生活の送り方(自己採点)をみると十分な評価をしていない。100満点で自分の夏休みの過ごし方を採点すると,「90点以上」を付ける子どもは多くなく,全体で約3割で,しかも学年が上がるほど少なくなる傾向がみられる。言いかえると,子どもも夏休みの過ごし方をより広い視点から判断できるようになり,単に楽しめたから高得点を付けることもないのであろう。自己理解の深まりに加えて,夏休みを単なる休業日であるとは捉えてはいないことが予測できる。では,自己評価を厳しくしている基準はどこにあるのであろうか。

第2に,生活の送り方の自己採点の基準を,小学生は何においているか。「あそぶ」(表6-2,表6-3)だけではなくて,「勉強」(表6-4)である。そして,とくに,「やりたいことができた」(表6-5)と「夏休みでないとできない思い出ができた」(表6-6)という点において,高い相関のあることがわかる。つまり,夏休みでないとできない豊かで充実した体験と深くかかわっている。逆に,「親からうるさく言われた」(表6-7)と「暇である」(表6-8)であるは夏休みの楽しさや自己採点を低める要因となっている。

第3に,そこで,夏休みの生活が楽しくて,充実するような体験をどの程度できているかが重要な問題となる。表7で,「楽しかった」体験の内容をみた。体験した(活動)内容には男女差が大きいことがわかるし,高学年になるほど減少するものがあることもわかる。また,表7-2から,自己採点の高い小学生の有意義な夏休みの生活の送り方を読みとれる。「したいと思ったことができた」が感じたことの第1位,ついで「一生懸命できた」「十分満足した」「知らないことを知った」「一人でやりとげれたこと」など,を感じれる体験が重要であることがわかる。なお,心に残った体験として,具体的には,「旅行をすること」や「キャンプをしたこと」や「川や海やプールで泳ぐこと」など,野外での活動が最もあげられている。部活での大会参加や合宿など普段の学校生活の中では経験できにくい活動が心に残っている。

第4に,夏休みの過ごし方の自己採点と,学校教育での「教科」学習に対して,子どもが好きか,そうでないかという教科に対する子どもの学習意識との関連をみた。とくに理科や社会科や国語といった教科の好き嫌いとは深くかかわっている。こうした教科を好きな子どもは夏休みの過ごし方にも,高い得点を付ける傾向がある。やはり,高学年になるほど,学校での学習と夏休みの過ごし方にも関連が強くなっている。なお,音楽,体育,図画工作とは少し相関が低くなり,家庭科では相関がみられない。

以上,夏休みの子どもの生活体験に関して,今回の報告では,夏休みの過ごし方の子どもの自己評価(得点)に重点をおきながら,子どもの生活体験の現状を明らかにしてきた。さらに,今後,夏休みをどのように保護者が受けとめて対応してきたかといった問題も取り上げる予定である。そして,夏休みが子どもの生活体験の拡充・深化にはたしてきた機能(役割)をいっそう明らかにしていきたい。

注)

- (1) 拙論「夏休みにおける子どもの生活体験」愛媛大学教育学部紀要 教育科学 第43巻 第2号, 1997, 1-17頁. なお, これには夏休みに関する文献を紹介し, 平成7年に実施した調査結果を報告している.

備考: 小論は, 1997 (平成9) 年6月7～8日に開催された, 第4回日本子ども社会学会 (東京学芸大学) で発表した原稿に加筆したものである. なお, 調査に協力をいただいた松山市立の窪田, 和気, 石井の各小学校には, 感謝いたします.